

アトリエ 琉游舎 だより 54号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/ 2019年6月5日発行
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

一劫一刹那

- ・琉游舎だよりの第1号を発行したのは2017年の6月5日。ちょうど丸二年が経ちました。2週間に一回のペースを何とか守ることが出来たのも、読んでくださる皆さんのお陰です。
- ・この2年間はあっという間であり、そしてとても長い時間でもありました。その刹那を楽しく過ごしたあっという間の2年間、そして行いの歩みを数えれば永劫の道のりのようでもあります。
- ・インド人の時間観はとても厳密に見える一方でとてもおおらかで不思議な時間です。
- ・「劫（こう）」はとてつもなく長い時間の単位です。私たちの数字の概念では説明のしようがないのですが、一説によれば43億2000万年を一劫と言い、別の定義では一つの宇宙が誕生して消滅するまでをいうようです。「劫」はお経によく出て来る言葉ですが私は一劫でも億千万劫でもこの言葉はすべて永遠と理解しています。「劫」は「未来永劫」の「劫」なのです。
- ・「刹那」は逆にとても短い時間を表す単位です。これも一説によると指をひと弾き（弾指）する間に65刹那あると言われていています。一刹那を西洋風に言えば約0.013秒、時間の最小単位です。
- ・法華経を読むと「劫」は「刹那」であり「刹那」は「劫」であると言う時間観がみえてきます。「永遠は一瞬の中にあり、一瞬は永遠の中にある」と言う仏教の世界観なのでしょう。
- ・琉游舎の2年は、この刹那に「永遠の過去から永遠の未来の中に生きているいのちのひとりとして自分もある」という感覚の一端を実感させてもらえる二年間でした。
- ・これも全て琉游舎で一緒に話したり、書いたり、読んだり、飲んだり、食べたりして下さった皆さんのお陰です。ありがとうございます。この一刹那が未来永劫であり続けるよう、皆さんとお会いして語り合う一刹那を一劫の心でお待ちしています。

6・7月のスケジュール

6月			7月			
月	火	水	木	金	土	日
10	11	12	13	14	15	16
	読書会 13:30		映画会 13:30		詩話会 13時半から	
17	18	19	20	21		23
			映画会 13:30			
24	25	26	27	28	29	30
	読書会 13時半 居酒屋の会16時		映画会 13:30			
7月1日	2	3	4	5	6	7
			映画会 13:30			7月の写経会は 第二日曜日です
8	9	10	11	12	13	14
	読書会 13:30		映画会 13:30		詩話会 13時半から	写経会 13時半

写経会
第二日曜
7月14日(日)
13時半から

映画会
毎週木曜日
13時半から

詩話会
6月8日(土)
7月13日(土)
13時半から

読書会
6月11日(火)
6月25日(火)
7月9日(火)
13時半から

狂言綺語…仏性Ⅱ

前は「草木国土悉皆成仏」。全ての存在は「仏性」を備えているから皆ことごとく成仏できるというお話をしました。これは自然の中に八百万の神を見るという元来の日本人の原始宗教と、中国から輸入された仏教の哲学的思考とが融合した日本人独自の仏教観だと言われています。自然と人間は皆同じ仏性を持つ仏さまなのですから、自然と対立したり制圧したりと言うような考えは出て来るはずありません。自然と共棲する農耕民族の日本人らしい楽天的な自然観、宗教観ですね。

天台宗の創始者、中国人の智顛に「一念三千」という教理があります。この教えが最澄（伝教大師）によって中国から比叡山にもたらされ「悉皆成仏」という日本独自の仏教観へと発展？していったようです。「一念三千」は私達が起こす一瞬（刹那）の思いの中に三千の世界が備わっているということ。要点だけ述べると、人間の心の「一瞬の思い（一念）」には「仏・菩薩・縁覚・声聞・天・人・阿修羅・畜生・餓鬼・地獄（三千世界）」の全てがあるという主張です。三千は全ての世界・宇宙と言ってもいいでしょう。つまり人間の心の中は仏から地獄までの間を有機交流電燈の波動（注1）のように行ったり来たりしているということです。この一瞬に地獄の沙汰を発するかと思えば、また次の一瞬は菩薩の救済の心に満ち、ある一瞬は修羅のごとく戦闘的になったかと思えば、仏の慈悲深い心を見せてくれる。全てが別々に存在するのではなく互いに行き来しながら一念のうちに宇宙をその中に内包しているという姿が、存在のありのままの姿であることを示しています。この存在のあり方をよく観ることによって自分の中にある仏（仏性）を観なさいと智顛は教えているのです。と言うことは自分の中にある「地獄性」もちゃんと観なさいと言っていることでもあるのです。ところが日本に輸入されるといつの間にかこの教えは「草木国土悉皆成仏」だけが強調され。その中にある地獄の側面は忘れ去られてしまったようなのです。本来は「草木国土悉皆亦住地獄（草木国土もまた皆悉く地獄にも住している）」と言う思想がそれを支えているはずなのです。

宗教は本来楽天的でありプラス思考でない救済にはたどり着けないでしょう。「地獄性」という悲観的マイナス面にこだわっているかぎり、そこに安住して地獄の振る舞いの限りを尽くすか、絶望してあきらめの結果地獄に住み続ける羽目になるからです。そしてそこがいつの間にか自分にとっては安らぎの場所だと錯覚してしまうようになるでしょう。他者にとっては地獄かもしれない自分にとっての安らぎの処は、それを極楽とは言わないものです。私にとって安らぎの処はあなたにもみんなにも草木国土全てにも安らぎの処でなければなりません。それがこの宇宙に存在する全てに「仏性」があるということなのです。それを信じることはとても楽天的で前向きなことです。自分に「仏性」があると信じる事が出来れば相手の「仏性」も信じる事が出来るはず。自分に「地獄性」があると分かれば相手の「地獄性」も受け入れる事が出来るはずです。「一念三千」の教理で一番重要なそして見落としがちなことがあります。それは「お釈迦様（仏）にも『地獄性』がある」と言うことです。「一念三千」はとても楽天的にみえる教えですが、その根底には「あるがままに自己を観よ」「あるがままに宇宙を観よ」と言う無我の眼が必要なのです。

「一念三千」の元となる人間の心の境地を「地獄性」から「仏性」までの十段階に分類したものを「十界」と言います。下から「地獄界＝怒りと恐怖」「餓鬼界＝貪り」「畜生界＝本能と欲望のままの行動」「修羅界＝喧嘩から戦争までの争い」「人界＝平常心」「天界＝歓喜」ここまでを六道と言ひ、安らぎのところに辿り着けなかったものはこの六道の中で生命を繰り返しているのです。これを六道輪廻と言ひます。この輪廻の輪から悟りによって抜け出すことを「成仏」と言ひます。この六道の次に「声聞界＝仏道を学ぶ」「縁覚界＝自己の内面的な悟り」「菩薩界＝仏の使いとして行動すること」「仏界＝無私の絶対慈悲の心」以上の十界を私たちは刹那の間に行ったり来たりしていると考えることが「一念三千」の教えです。お分かりのように現実世界以外のどこかに地獄があったり仏さまが居たりということはありません。地獄から仏まですべて私の心の中にあるのです。方便（人を真実の教えに導くための仮にとる便宜的な手段）によって地獄や極楽を描いたり膨ったり物語ったりすることがあってもそれは仮のもの、方便なのです。

「一念三千」の教理を前向きに受持すれば、必然的に「餓鬼界」や「阿修羅界」などの下の界でうろろうしてはいけないという自覚とともに、上の界へ向かっていく希望と勇気が湧いてくるでしょう。三千という全宇宙が網の目のように繋がっている中で、私もあなたも一切のものは全体を離れて個別に存在することが出来ないことも分かります。つまり自分だけが救われたと思ってもそれは本当の救いにはなっていないということ。そうなる全体が救われなければ自分の救済もないということが分かるはず。ならば次に私達は全体の救済のための「行い」に踏み出すはず。その時私たちは宇宙に存在する全てのものに「仏性」が平等に与えられていることをはっきりと信じる事が出来るようになるでしょう。

自然と対話していると、今まで何とぼんやり生きてきたのだろうということを思い知らされます。自然は今日雨が降るか日が照るかなどと思ひ煩って時を過ごすわけではないでしょうが、少なくとも雨には雨の晴には晴れの装いを融通無碍に纏いながら生きていくことだけは分かります。

私は自然を手本として仏性も地獄性も融通無碍に纏えるようになることを信じて 琉游舎：戸井 出琉・恭子 琉游舎で日々楽天的な毎日を過ごしていきます。（出琉） お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152

注1：宮沢賢治「春と修羅」から（わたくしといふ現象は仮定された有機交流電燈のひとつの青い照明です）

矢板市大槻2319-17 コリーナ矢板C-850